

中国のむかしばなし

近藤 伊津子編

『人参の精と紅ホンのものがたり』

シャオサンツ
小山子與紅妞

むかし、むかし、中国の東北の長白山の麓に小さい女の子がとうさんと二人きりで住んでいました。

女の子は紅ホンといい、元気なあいらしい子どもでした。紅のとうさんは人参採りの名人で、毎日、朝早くに家を出て、夜遅くまで帰りませんでした。

なにしろ、となりといっても何里も離れて、辺りには人っこ一人通りません。それで、紅ホンは友だちが欲しいなあ、いつも思っていました。

毎日、とうさんが出かけたあと、家の窓から遠い山なみをながめ、春の訪れを楽しみにしていました。

野も山も花々が咲き、いつか、紅ホンには小さい友だちが訪ねて来てくれそうな、そんな気がしたのです。

昨日きのうも紅ホンは、待ちました。けれども誰一人として訪ねて来てくれませんでした。今日は、もう、がっかりしていました。

太陽がすっかり高く昇り、草花を照らしはじめたころ、突然、歌声がきこえてきました。

お日さまお日さま

ふしぎなお日さま

お日さまは

わたしの緑の服と帽子をてらすよ

お日さまは

わたしにほほえむよ

紅は、びっくりして外にとび出し、うれしくなって、

自分でも歌っていました。

お日さまお日さま

大好きなお日さま

お日さまは

わたしの赤い服と帽子をてらすよ

紅は、目の前に男の子がいるのに気がつきました。小さい男の子は、袖口と裾オソに、ひらひらのふち飾りのついた緑色の上着を着て、頭には赤い丸い玉をのせた小さな帽子を被っていました。

二人は、しばらく、じっと見つめあい、小さい男の子は、やっと口をききました。

「わたしは小山子シヤコサン。山の方に住んでいるんだ」

「わたしは紅ベニよ。友だちができて、うれしいな」

紅は手をたたいてよろこびました。

それから二人は、まるで、ずっと前からの友だちのように遊びました。

石ころで陣とりしたり、葉っぱをつないで腕輪を作ったり、お昼になると、紅ベニの出した、まん頭に、小山子シヤコは、懐から手の形をした葉っぱを出し、はさんで食べました。

紅は、小山子と一緒にのお昼がともうれしくてたまりません。

それから、木の枝を馬に仕立て、小枝をムチにして走りまわり、夕方まで楽しみました。

明日あした、天気がよかったら、又、遊びに来ることを約束して、小山子は帰っていきました。

こうして、来る日も来る日も、小山子と紅は、遊びすごしていましたが、ある朝、紅が起きてみると、外は、雪が降っていました。

紅はずっと小山子を待ちました。けれども、とうと

う、小山子は来ませんでした。

夜になり、とうさんが帰って来ても、紅は、淋しくて、ほんやりしていましたので、「どうしたの」とたずねられると、小山子が、今日は来てくれなかったこと、それでとてもがっかりしていることを話しました。

紅のとうさんは、「小山子？それはだれのことかね」とおどろいてたずねました。

そして、この山の家の近くには、そういう子どもはいないことを話し、虎や狼のばけものではないかとひどく心配しました。

「紅や、今度、小山子という子が遊びに来たら、糸に針をつけ、その子の上着につけてみてくれんかね。その糸をたぐって行けば、その子のことがわかるだろうよ」
そう言いつけられて、紅はうなずきました。

さて、翌日、よく晴れたお天気になり、小山子は、遊びに来ました。一日、存分に遊び、小山子が帰る頃、紅は、上着に針を付けました。

その翌朝は大へんな吹雪きになりましたが、紅のとうさんは人參採りの仲間をつれて、糸に沿って、山の奥へと入っていききました。

いつのまにか、一度も足を踏み入れたことのない山奥に来ていました。辺りは吹雪にもかかわらず、ふしぎなことに山肌には濃い緑の草がありました。

紅のとうさんは、とうとう、糸のおしまいのところにたどりつきました。

そこには、丈三、四尺もある人參が、手の型をした緑の葉をつけ、薬の根本には鮮やかな紅い実をびっしりと付けていました。

紅のとうさんは、この人參は「十年もの」に違いない、と思いました。

この値打ちものの人參がおどろかないように、声を出さないで、そうっと掘りおこしました。

人參の根は、子どもの形をしていて、根の囲りには、ひげが付いており、ふち飾りのように見えました。

紅のとうさんは、大へんな高値たかねで人參を売り、赤い実だけ持ち帰りました。

その夜、紅かは父さんの持って帰った人參の赤い実を見て、大そう泣きました。

紅かは赤い実を植えました。

小山子シヤボシのことをいつまでも忘れることができませんでした。

中国では、山奥で採れた人參は効目のある薬として、大へんな高値がつけました。人參採りの人達は、山奥で「人參」と言うと、人參はおどろいて、遠くに逃げ去ってしまうと、信じており、「山ヤマ」と呼ぶのが慣わしでした。

